

## 深澤南土実著

『バレエ・デ・シャンゼリゼ  
第二次世界大戦後フランス・  
バレエの出発』

森 立子

第二次世界大戦の終焉とともに、バレエ界においても新たな動きが世界各地で生まれる。フランスにおけるこの「新たな動き」の一翼を担うのが、バレエ・デ・シャンゼリゼ（シャンゼリゼ・バレエ団）であった。

その活動期間は1945年から1951年までのわずか7年ほどと極めて短い。とは言え、ローラン・プティ、ボリス・コフノ、クリスチャン・ベラルを始め、いずれ劣らぬ錚々たるアーティストの面々がこのバレエ団の活動に関わっており、また彼らが上演した作品の数も50を超える。しかもその中には《若者と死》や《グラン・パ・クラシック》のように、今日なお優れたダンサーたちに踊り継がれているレパトリーも含まれている。

かくのごとく、バレエ・デ・シャンゼリゼは、1940年代半ばから1950年代初頭のフランス・バレエ界において確たる存在感を示すカンパニーであったわけだが、それにもかかわらず、このバレエ団に関する研究はいまだ驚くほど手薄な状態にある。本書の著者によれば、このテーマに特化した研究書は一点のみ、研究論文も一点のみであるという。こういった状況にあって、バレエ・デ・シャンゼリゼの活動全体を視界に収めて論じた本書が出版されたことは、日本の舞踊研究者にとっても、またこのテーマに関心のある一般読者にとっても非常に意義深いと言えるだろう。

本書は全4章から構成されている。第1章「バレエ・デ・シャンゼリゼ誕生前夜」では、バレエ団結成のきっかけを作った「ダンスのリサイタル」と「ダンスの夕べ」、さらにはこの時期に創作・初演され、後にバレエ団の主要レパトリーとなっていく《旅芸人》と《ランデヴー》について論じられる。またこの章では、バレエ団の拠点となるシャンゼリゼ劇場、バレエ団の芸術監督となるコフノについても論じられている。

第2章から第4章では、バレエ団の結成から解散までの活動、特にその間に上演された作品群の考察が時系列に沿って進められていく。第2章では1945年から1946年にかけての2年間で考察の対象とされる。一方、これに続く第3章では、1946年に発表され、やがてはバレエ・デ・シャンゼリゼの代表作となる《若者と死》一作に焦点があて

られ、その創作の経緯、台本と振付、「若者」の解釈、作品についての批評と評価、といった様々な点に関する検討が行われる。そして第4章では、1947年から1951年のバレエ団解散まで、およびバレエ・デ・シャンゼリゼに関わったダンサーたちのその後が描かれる。

また本書には「資料編」が付されており、ここに「バレエ・デ・シャンゼリゼの活動年譜」と「バレエ・デ・シャンゼリゼの上演作品」と題された、筆者作成による二つの資料が掲載されている。前者は、1942年6月の「ダンスのリサイタル」から1951年のバレエ団解散に至るまでの上演状況（上演演目を含む）を同時期のパリ・オペラ座の上演状況と並べて提示したもの、後者は1945年から1951年に初演されたバレエ団のレパトリー各作品の初演時のデータをまとめたもので、バレエ・デ・シャンゼリゼに関する情報収集の際に、参照すべき基礎資料の一つとなりうるものである。

本書が、先行研究および関係資料の網羅的な調査、そしてそれらの丁寧な読みに基づいて執筆されたものであることは、本文からも、豊富に提示されている写真資料や表などからも明確に読み取ることが出来る。その上で敢えて欲を言うならば、こうした資料からの引用の際に、著者自身による分析的視点がもっと盛り込まれても良かったのではないか。例えば、《旅芸人》について、「当時の批評家らはこの作品を次のように絶賛した」という文章に続けて、ギィ・ベルナル＝ルジャンティ、J. G-R, J-F. デボワ、ジャン・ドルシーによる評が羅列的に記されている。だが、ここでこれらを単に「絶賛評」として括るのではなく、これらそれぞれの言説が発される背景にも踏み込んだ分析がなされていたならば、より立体的な歴史像が描かれ得たであろうし、著者のオリジナリティもより鮮明に打ち出されることになったのではないだろうか。著者が今後の研究によって、こうした読者の欲望にも応えてくれることを強く期待したい。

（法政大学出版局、2020年2月刊行）

溝端俊夫・松岡大・呉宮百合香・  
本田舞・石山星亜良編  
『舞踏という何か』

相原 朋枝

本書はNPO法人ダンスアーカイヴ構想が実施した舞踏現況調査の報告書である。NPO法人ダンスアーカイヴ構想とは、舞踏を中心とした日本の洋舞史における重要な一次資料の収集、保存、

公開等のアーカイヴ活動を行う法人である。近年、シンポジウムの主催や復刻上演など、多角的なアーカイヴ活動を展開している。同法人はアーツカウンシル東京の助成を受け、2017年より3年に渡り国内外の「舞踏家あるいは舞踏に影響を受けて様々な形で舞踏を実践する人たち」に対する調査を実施した。本書はその成果報告として位置付けられる。

本書は「舞踏ディアスポラ」, 「舞踏リサーチ2017-2019報告書」, 「舞踏スクリーンショット2019」, 「精神のリレー2019」の4つのパートと2編のコラムから構成されている。

冒頭の「舞踏ディアスポラ」には、田中トシ、Oguri、ゆみうみうまれ、吉岡由美子の4名の国外を拠点に活動する舞踏家が寄稿している。

続く「舞踏リサーチ2017-2019報告書」には2017年度と2018年度の調査結果が記されている。両年の調査手法はアンケートを使用した定量調査である。2017年度は国内の舞踏家のみを調査対象とし、2018年度はこれに国外の舞踏家が加わった。アンケートの回収数は2017年度125件、2018年度は332件である。設問は20項目あり、「活動状況」, 「経済状況」, 「舞踏に対する価値観」, 「公演の記録」の4つのカテゴリーに分類される。

結果の一部を紹介しよう。まず、2018年度の国外の舞踏家を対象とした調査では50ヶ国の舞踏家から回答を得ている。国別に回答者数が多い順に並べると、米国56件、フランス23件、ドイツ22件であり、欧米の他には中南米やアジア圏からの回答もある。これについて本書は「舞踏の(実践者)が世界に広がっているという現状の一端が可視化できた」(p.36)と総括している。

「経済状況」については、舞踏家としての活動収入が年間100万円(10000ドル)を越えるのは国内14%、国外12%と、国内外の差は少ない。対して「舞踏家・ダンサーとしての経済状況への満足度」は「全く満足していない」が国内40%、国外15%と、異なる結果になっている。

「舞踏に興味を持ったきっかけ」の設問に対する回答の上位は「舞踏ワークショップ・舞踏作品の参加」, 次いで「舞台鑑賞」である。きっかけとなったワークショップを主催した舞踏家には、イタリアを拠点とする竹之内淳志の名が最も多く挙がっている。「これまで観た舞踏公演の中で一番印象に残っているものを教えて下さい」という設問の回答としては、『ラ・アルヘンチーナ頌』や『わたしのお母さん』といった大野一雄の作品が最多登場であり、この結果は国内外に共通している。

次に続く「舞踏スクリーンショット2019」は2019年度の調査報告である。2019年度は2017、2018年度の回答者を対象に、自由記述による回答

形式のアンケート調査を実施している。回収数は日本語回答57件、英語回答57件、スペイン語回答1件である。質問は「舞踏をはじめたきっかけ」, 「舞踏の魅力」, 「舞踏のアーカイヴについて(舞踏はどのように残すことができるか)」であり、回答は舞踏家のプロフィール写真と併置されている。100を超える舞踏家の回答からは、世界各地で活動する彼らの多様な舞踏観が窺える。

さらに「精神のリレー2019」のタイトルのもと、伊藤キム、鈴木ユキオ、向雲太郎他、現在活躍している第三世代の舞踏家7名のエッセイが掲載されている。彼らは自身の舞踏の成り立ちについて、影響を受けた舞踏家との関係性から説明している。

カラー写真やポップなイラスト等のビジュアル・イメージを多用した、いわゆるムック本のような本書の装いからは、従来とは異なる舞踏のイメージを発信するといった編集側の意向が見てとれよう。また、グローバル化した舞踏実践および舞踏研究のニーズに応えるべく、本書は全て日英二ヶ国語での記載となっている。

土方巽や大野一雄、大路駱艦や山海塾といった舞踏第一世代、第二世代の舞台を目にした者にとってみれば、はたしてこれが舞踏なのかと首を傾げたくくなるような実践も、中にはあるかもしれない。とはいえ、これが現在進行形の舞踏の営みを反映したものであり、舞踏は既に「開かれて」いる。では舞踏の成立要件とは何か。何をもちて舞踏とするのか。精神、技法、美学、生き方、あるいはその全てか。そのような問いかけは常にある。舞踏の要素還元はそもそも困難であり、一方で舞踏家の活動の場は確実に広がっている。本書は舞踏の実践者の証言を数多く積み重ねることによって、「舞踏とは何か」を浮かび上がらせようとする試みなのであろう。

ところで、2018年には舞踏に関する多彩な論考やエッセイを集めた“The Routledge Companion to Butoh Performance”がラウトレッジ社より刊行されている。二つの性質は異なるものの、ほぼ同時期に欧米と日本で舞踏の現況を伝える書が相次いで発表されたことは興味深く、併読を勧めたい。

(NPO法人ダンスアーカイヴ構想, 2020年2月刊行)

#### 参考文献

Baird, B. & Candelario, R. eds., *The Routledge Companion to Butoh Performance*. London: Routledge, 2018.

# 遠藤保子監修『映像で学ぶ舞踊学 —多様な民族と文化・社会・ 教育から考える』

金光 真理子

舞踊学を学ぶ大学生・初学者のためのテキストといえ、長らく舞踊教育研究会編『舞踊学講義』(1991)であったが、このたび30年の歳月を経て同じ大修館書店から出版された『映像で学ぶ舞踊学』(2020)は、新たなテキストとなるだろう。前著が、舞踊(研究)の歴史から、舞踊研究の諸概念、舞踊教育、ひいてはまさに大学生向けの研究・調査の手法、舞踊の指導法、基礎文献の解題までを網羅した教科書であったとすれば、後者はそれを礎としながら現代的な論点やメディア資料を取り入れ、舞踊学に興味・関心のある、より多くの読者にアプローチしやすいテキストになっている。

最大の特徴は、書名の通り、文字情報とセットになった映像資料で、出版社のWebサイトから視聴できる。映像はどれも各項の執筆者が調査地や現場で撮影したもので、貴重な記録も数多い。そして何よりも映像によって本文に対する興味も内容の理解も格段に高まることは間違いない。各映像の構成も、対象とする国・地域の環境・文化等の端的な紹介から始まり、動画のキャプション解説等、分かりやすく編集されている。

全体の構成は4つの章(第I章「グローバル社会と舞踊」、第II章「多様な民族と舞踊」、第III章「舞踊の指導例」、第IV章「デジタル記録と教材」)から成る。まず舞踊学の観点を示した後、各論そして(舞踊)教育へという流れは前著と同じながらも、新たな論点や提示方法が見られる。とくに現代で舞踊学を学ぶ視点としてグローバル化等の問題意識や、デジタル記録・教材は新しい論点であるし、参考文献の表記方法や、各節の始めと終わりに「学習のねらい」と「理解度チェック」を設け、学習内容を整理する構成も工夫が見られる。

第I章は6つの節から成り、第1節(「舞踊と民族・文化・社会」)の総論の後、第2節(「民族舞踊と芸術舞踊」)と第3節(「民俗芸能の保護」)が対象となる舞踊の概念ないしジャンル、第4節(「舞踊と身体」)が現象学的な観点から「身体」という論点、第5節(「舞踊と教育」)は舞踊教育について論じ、第6節(「舞踊と共創」)は障がい者や高齢者との共創の事例を具体的に紹介している。現代で舞踊学を学ぶ視点が網羅的に示されているが、各節が段階的に繋がるわけではないため、初学者には方向性が捉えにくいかもしれない。

第II章は、11の国・地域の舞踊の事例と6つのコラムがあり、いずれも興味深い事例であると同時に日本の多くの研究者の実績が認められる。11の節で取り上げられている事例は、日本の仏舞(第1節)、沖縄のウ

ンダルー(2)、韓国の舞踊(3)、ネパールのネワール人の舞踊劇(4)、タイの舞踊(5)、インドネシアの舞踊(6)、南インドの舞踊(7)、トルコのセマー(8)、エチオピアの舞踊(9)、ガーナの舞踊(10)、ブラジルのフレーヴォ(11)と多岐に渡るが、どの節も対象とする国・地域の社会・文化の基礎知識を端的に纏めており、分かりやすい。参考文献の引用方法もより学術的になっている。ただし、節によっては参考文献が限定的で、教科書的なテキストだからこそ主要な基礎研究を網羅的に示して欲しかった。

また第II章の各論は、国・地域を問わず共通するような大きな問題意識の下、個別の事例を検討しているのが特徴である。この大きな問いを纏めると、「地域社会における舞踊表現の意義」(第1節)、「伝統文化の復活・継承」(2)、「新しい伝統の創造」(3)、「舞踊は社会を映す鏡」(4)、「舞踊と信仰」(5)、「絆」をむすぶ舞踊(6)、「社会と舞踊のつながり」(7)、「身体動作の文脈変換」(8)、「多民族社会における舞踊と社会の関係」(9)、「舞踊と社会の関係」(10)、「舞踊の文脈変換(による変容)」(11)である。短い論考のため、大きな問いがかえって紋切り型のまとめを生んだり、対象特有の結論に留まったりするのも仕方ないが、民族誌の確実な記述を通して大きな問いへうまく還元できている節もある(第1、6、11節等)。なお、随所に挿入された6つのコラムは、どれも興味深い内容で、端的に分かりやすく纏められている。

舞踊教育に関する第III章は、もっぱら学校教育における舞踊の指導実践例を具体的に論じている。この舞踊研究と舞踊教育との強い結びつきは、音楽学(民族音楽学)を専門とする紹介者からみると実に素晴らしく映る。研究がアカデミズムにとどまらず教育へ還元されてきた歴史は重要で、7つの節の事例(ボディワーク他、よさこいソーラン、江州音頭、カラリパヤット、サンバ、カポエイラ、秋田の盆踊り)は、関係者にとって有益なばかりでなく、どの読者も楽しみながら理解を深めることができるだろう。また、デジタル記録と教材に関する第IV章も、現代ならではの可能性と重要性がよく分かる。

このように『映像で学ぶ舞踊学』は、現代の日本で舞踊学を学ぶ者にとって新たな教科書となり基礎文献となるテキストである。映像資料と文字情報を組み合わせたコンセプトをはじめ、26人もの執筆者の豊富な論点・事例の個性を生かしながらも全体として統一感のある構成は、監修者そして編者の情熱と尽力の賜物だろう。その実力を称賛すると同時に、舞踊学に興味・関心を持ち、学ぶ人々へ広くこの書籍を勧めたい。蛇足ながら199頁の著者と執筆項の一覧に一部誤記が見られる。

(大修館書店、2020年4月刊行)